

鶴林寺の歴史

鶴林寺は比叡山延暦寺を本山とする天台宗の寺院で、山号を刀田山（とたさん）、寺号を鶴林寺（かくりんじ）、「刀田山鶴林寺（とたさんかくりんじ）」といます。

その始まりは6世紀半ばで、仏教伝来のころ、高句麗の僧、恵便法師が、排仏派（物部氏）の迫害を逃れて、播磨の地に身を隠しておられたのを聞いた聖徳太子が大和からはるばる、恵便法師の教えを受ける為、この地を訪ねてこられ、学問所「木の丸殿」を建てました。（現在塔頭・浄心院前土塀の不開門跡だと言われています）

その後、長じて太子が16歳の時（589年）、秦川勝に命じて3間4面の精舎（今の太子堂）を建立し、「刀田山四天王寺聖霊院」となづけられたのが、鶴林寺の始まりであると伝えられています。

養老2年（718年）武蔵国の国守「身人部春則（みとべはるのり）」が太子の遺徳を偲んで寺域を拡張し、七堂伽藍を建立しました。

鎌倉時代から室町時代、太子信仰の高まりと共に、鶴林寺は全盛時代を迎え、寺坊30数ヶ坊、寺領25,000石、楽人数十人がいて、太子の命日に舞楽を奏していたと言われています。この時の境内は、24町（2.6km²）、僧坊は300、又奉仕する僧兵は百余人と伝えられ、寺号も「刀田山四天王寺」と改められ、雅楽を奏する楽人数十人も抱えていた

とされています。今でも残る「だ太鼓縁」が当時の隆盛ぶりを偲ばせています。

「鶴林寺」の寺号は、天永3年（1112年）、鳥羽天皇から勅額をいただき、「鶴林寺」と寺号を改め、勅願所に定められました。

鶴林寺のいわれは、お釈迦様が涅槃（入滅）に入られた時、周りの沙羅の林が一斉に白く枯れ、鶴の群のように見えたところからつけられたとされています。又山号の「刀田山（とたさん）」は、恵便法師の下で修業していた日羅という僧が、苦行に耐え切れずに逃げ出そうとしていたのを、聖徳太子が呪文を唱え、天から刀が降ってきて、田に突き刺さり囲われてしまい、逃げられず心を入れ替えて修行に励んだという伝説があり、又、聖徳太子の造られた水利により、刀のようにキラキラ光る米が獲れたところに由来するという説もあります。

その後、戦国時代、江戸時代を経て、明治に入り、神仏分離令により、8ヶ坊あったものが、現在は東から、真光院、宝生院、浄心院の3ヶ坊1万5千坪になっています。

鶴林寺の保有文化財は国宝2件、重要文化財18件、県指定文化財11件、市指定文化財25件合計56件があり、特に加古川市内の国宝2件のうち2件、重要文化財23件のうち18件が指定を受けています。（平成26年4月現在）

天台宗の伽藍配置は、講堂の前方左右に法華堂、常行堂を配置する例が多く、鶴林寺はまさにその伽藍配置です。

戦国時代の黒田官兵衛の書状、秀吉の禁制も残されており、「刀田の太子さん」「播磨の法隆寺」とも呼ばれ、庶民の信仰心厚く、歴史を今に伝えております。

本堂

本堂は室町初期の応永4年（1397年）、京都の金閣寺と同年に建築された建物で、太子堂とともに、明治34年3月国宝に指定されています。

和様、禅宗様（唐様）、大仏様（天竺様）の3様式を取り入れた折衷様式の代表的な建築物です。

和様は、鎌倉時代以前からの日本古来のもので、禅宗様は、中国宋の禅宗僧が伝えた様式で、大仏様は、重源によって伝えられた東大寺大仏殿の再建に用いられた様式です。

内陣には、3間巾の須弥壇と厨子が据えられています。内陣には秘仏本尊の薬師三尊像と、二天像（持国天、多聞天）が安置され、厨子の外は十二神将がお守りしています。

本尊薬師如来、日光菩薩、月光菩薩、持国天、多聞天は秘仏で、60年に一度の開帳で、今回は平成9年でしたので、今回は平成69年に開帳があります。

本堂入り口左に「びんずるさん」がおられます。お釈

迦様の一番弟子で、十六羅漢の1人で、「びんずるそんじや」とも呼ばれております。他に影響を及ぼす法力があり自分の体の悪いところがあれば、「びんずるさん」の同じ場所を撫でると、病氣やけがが治ると言われて「なで仏」と呼ばれ、みんなが撫でるので「びんずるさん」は黒光りしています。

この「びんずるさん」はお酒が大好きで、修行中も隠れてお酒を呑んでいるのを見つかり、破門されるのですが、後に許されて本堂の外陣にお祀りされています。

太子堂

平安時代、天永3年(1112年)の建立で、兵庫県で最古の木造建築物で本堂と共に国宝に指定されています。

太子堂はもと方三間、宝形づくり、檜皮葺のこじんまりとした建物で法華堂と呼ばれていました。元来が法華堂であったこの建物が太子堂の名で呼ばれるようになったのは、堂の東庇南の板壁に、聖徳太子の像が描かれて以後のことです。

法華堂は元来、僧の法華三昧の修行する道場でした。本尊は釈迦如来で、普賢菩薩、文殊菩薩、四天王をお祀りしています。法華三昧は21日間の座禅と行道の2つの行で、トイレと食事以外は休むことのできない行で、

行者の瞑想を助ける為、堂内壁画が描かれています。

永年の灯明などの煤が付着することにより、真っ黒になり壁画は肉眼では確認できませんでしたが、昭和51年赤外線写真により撮影され、線描がわかりました。その後須弥壇の表側「九品来迎図」、裏側「仏涅槃図」が復元模写されて、宝物館に展示されています。

新宝物館の開館とともに、平成20年から平成24年にかけて、東京芸大の高木かおりさんが当時と同じ技法を用いて、釈迦の姿を極彩色で甦らせました。

縦170cm、横190cmの大きさです。

赤外線写真を基にし、ヒノキ材に線描し、X線分析で特定した顔料で彩色したものだそうです。

法華堂に太子像が描かれて太子堂になったのは、平安末期から鎌倉時代、室町時代にかけて盛んになった太子信仰の為です。従来は貴族しかお参りできなかった堂に一般人もお参りできるように、堂の南に1間巾の礼堂(らいどう/外陣)という拜む空間が増築されました。修業堂から法要堂へと堂の質が変化したことを物語っています。

太子堂の檜皮葺は、約30年に1回葺き替えております。

屋根板の内側には、正中3年(1326年)の修理の時の墨書が残っており、ここには天永3年(1112年)に3回目の修理、宝治3年(1249年)に4回目の修理があったことが記されています。同時代の建物としては、天

治元年(1124年)の中尊寺金色堂(岩手県)があります。

鐘楼

応永14年(1407年)建築で国の重要文化財になっております。

袴腰付鐘楼と呼ばれる優美な建築で、武士の袴のように見えるところからそのようにいわれています。

桁行3間、梁行2間の本格的な建築物で本堂と同時期に造られました。

鐘は2階で撞くようになっています。

鐘は朝鮮半島高麗で1,000年ほど前に造られたもので、重要文化財です。地面すれすれに吊るして、下から空気(共鳴音)が漏れないようにし、上の甬(よう)から余韻が漏れ出る仕組みになっていますが鶴林寺では、鐘は2階に吊るして撞くようになっています。

高麗鐘の特徴は、鐘の上部に円筒(甬という)が突き出ていることです。

鐘の大きさは高さ94.5cm、幅53cm、重さ1t弱。大きな鐘は48tのものもあるそうです。又、幅50cm以下の鐘は半鐘と呼ばれています。

鐘を守る為、年2回、観月会(ことしは10月25日)と12月31日除夜の鐘に撞かれています。

黄鐘調(おうじきちょう)という音色で、軽く、高く、澄み切って、爽やかな音色といわれています。一般的には、鐘は4本柱の鐘楼に吊るされて、盤渉調(ばんしょうちょう)という音色で、重く、余韻のある音です。鐘の寿命は200年と言われ、1000年経過しているので「ラ」の音が「ファ」になっているようです。

鐘の役目は、時刻を知らせたり、寺の行事の合図などに使用されたようで、現在は普段は鐘の音を聞くことはできませんが、大みそかには一般の人でも撞くことができます。

加古川市には、同じような高麗の鐘が尾上神社にあり、鶴林寺の鐘よりさらに100年ほど古いものです。

日本最古の鐘は京都妙心寺の鐘で、文武2年(698年)、加古川市内の鐘で一番古いのは、志方町円照寺の釣鐘で明応7年(1498年)に造られたものです。

宝物館

平成24年に太子堂が建てられて900年を記念して、約3億6千万円かけて、高床式、鉄筋コンクリートの平屋で、床面積442㎡あり、盗難防止、宝物保管の為新宝物館が建設されました。

宝物館の見所は、やはり「あいたたの観音さま」と太子堂内の板壁に描かれていた壁画だと思います。

太子堂内部は、永年の灯明などの煤が付着することにより、真っ黒になって肉眼では確認できなかった壁画が、昭和51年赤外線写真により撮影され、線描がわかりました。平成21年「仏涅槃図」、平成22年「九品来迎図」の復元模写が完成し、宝物館に須弥壇と共に再現され、展示されています。太子堂内部の全壁画が国の重要文化財になっています。

あいたたの観音さま

もとは観音堂にお祀りされていた「金銅聖観音立像」又は「愛太子観音」という観音様です。像高82.4cm、大人1人分程の重量だそうです。腰、衣、眉、目、ほほ、首筋の線に特徴があり、お顔はアルカイクスマイル（古代ギリシャ彫刻に見られる微笑に似た表情）。優雅な腰のくねりはシルクロード文化の影響を受けています。奈良時代前期の白鳳仏で、金銅仏です。青銅の上に金箔をはったものでできています。国の重要文化財です。

日本国内は勿論、昭和14年のドイツを始め、アメリカ、スイス、ベルギーなどにも出かけられ、世界的にも評価の高い日本を代表する観音様です。

以下は加古川に残る民話からの引用です。

「鶴林寺の観音堂に、金色に燦然と輝く観音様がお祀りし

てありました。

お身の丈、1.1m、重量105kgもあって、そのお姿の神々しさと美しさにはお参りに来た人を引きつけずにはおかないほどでした。それにもましてこの観音様は、閻浮檀言（えんぶだごん*注）光を放つ黄金仏（おうごんぶつ）といわれていました。これを聞いた泥棒が、この仏像を盗み出し、鑄つぶして売ればいっぺんに千万長者になれるだろうと悪い考えをおこし、2~3人の仲間と共に、ある夜ひそかに観音堂に忍び込んで、まんまと盗み出してしまいました。

そこで、見つからないように舟に乗せて、淡路島まで運びだし、7日7夜「タタラ」にかけ、鑄つぶそうとしましたが、とうとうだめでした。

泥棒は大変腹をたてて、力まかせにハンマーで腰のあたりを殴りつけると、「あいたたー」と言われたというのです。驚いた泥棒はものをいう仏様はどんな罰をあてるかもしれないと、おおいに恐れをなして元通り観音堂へ返しに来たと言われています。それから誰言うとなく「あいたたの観音さま」と呼んで一層親しまれるようになったということです。」（郷土のおはなしとうたより）

*注 「須弥山（仏教の世界説で、世界の中心にそびえ立つという高山）の南方にある大陸の大森林を流れる河の中に産するという砂金」

九品来迎図

九品来迎図は、須弥壇釈迦如来坐像後方の板壁に、阿弥陀如来の来迎を9種の図で表しています。左上が「上品上生」で最も上の位で、右下が「下品下生」で最も下の位を表しています。「観無量寿経」に説く9種の来迎の様子や平安時代の鶺鴒などの風景、風俗を一画面に描き、人々に感じ取らせようとしていることがわかります。

人の世のその人の行いにより、あの世からのお迎えを9段階に分けていて、まさに絵で見る説法です。「上品上生」では、阿弥陀如来が伴をおおぜい引連れてお迎えに来ているし、「上品中正」では、帰り来迎の姿が描かれ「下品下生」では、地獄から鬼が火の車で迎えに来ています。又、当時の庶民の暮らしが描かれています。

仏涅槃図

釈迦入滅の際、菩薩や阿羅漢が嘆き悲しむ様子が描かれています。沙羅の木が釈迦の姿を分断するように描かれ、釈迦の後ろに衝立が描かれており、摩耶夫人が釈迦と面会して帰るところが描かれています。

この仏涅槃図の釈迦の大きさは、周りの人とほぼ同じ大きさですが、時代が下ると釈迦は大きく描かれ、周りには人々の他に動物達も増えてきます。

釈迦は枕をして、あお向けで、手は体の両側に添えてあります。後の仏涅槃図では、右手を枕にして、横向けになっています。この仏涅槃図では、鳥や小動物も少ししか描かれていません。他に類を見ない構図が確認されました。平安初期の仏涅槃図の特徴らしいです。又、他の仏涅槃図を見られる機会があれば、比較して見て下さい。

日本で一番古い仏涅槃図は、応徳3年(1086年)の高野山金剛峰寺のもので、釈迦は鶴林寺のものと同じようにあお向けで、手は体の両側に添えてあります。

釈迦が亡くなられた時、周りの沙羅の林が一斉に枯れて、真っ白になって、鶴のようになったことから、鶴林寺の謂れになったと言われています。